

恩納村における戦災の状況 (その1)

現在、総務省のホームページに第二次大戦での全国の被災状況を紹介する「国内各都市の戦災の状況」というコーナーがあります。このコーナーに掲載するために、恩納村の戦争、戦後の状況についてまとめております。2回にわたってその内容をご紹介します。恩納村の戦争を知る一助となりましたら幸いです。(※本文は総務省ホームページでの掲載にあわせ「である」調で統一しています)

1. 沖縄戦前夜

1944年8月から恩納村にも日本軍部隊が村内各地に駐屯していた。第24師団歩兵第32連隊の本部が山田国民学校におかれ、各集落の学校、公民館、民家などに大隊、中隊が配備された。

第32連隊の「戦闘指導要領」には米軍が沖縄島西海岸から上陸してきた際の戦法が明記されており、その中で水際で撃退する方針が示されていた。この方針にもとづき、村内にトーチカとよばれる陣地や、壕がつくられ、現在もこうした戦争遺跡が残されている。これらの陣地構築作業は、米軍の上陸を1944年の12月と予定し、「昼夜兼行」の突貫作業ですめられた。陣地構築に必要な坑木を確保するために、恩納岳や周辺の山々から松をはじめとする木々が次々と伐採されていた。伐採した木は腐らないように国民学校の生徒たちが皮をはぎ、その後製材した材木は住民の馬車も動員し、南部へ運ばれていた。王府時代、恩納村の木々は保護育成され美林を保っていたが、陣地構築のためにことごとく伐採され消滅した。

第32軍の現地自給の方針のもと、沖縄島北部10村(名護町、恩納村、金武村、久志村、東村、大宜味村、国頭村、今帰仁村、羽地村、本部町)から物資を集める仕組みが整えられていった。第32野戦貨物廠(しょうぶしょう)という部隊が国頭地方事務所を通じて、野菜、甘藷、果

実、魚などの食糧や砥石、製紙材料などの物資を集め、日本軍に提供していった。

2. 米軍上陸

1944年12月、フィリピンレイテ作戦へ投入されるため、第9師団が台湾に移動し、恩納村に駐屯していた第24師団歩兵32連隊は、第9師団のいた南部に移動した。その後恩納村を拠点とした戦闘部隊は第二護郷隊が中心となった。第二護郷隊は国頭、大宜味、東村の15歳から18歳の男子を中心に、中頭郡の男子もあわせ約400人のゲリラ戦、遊撃戦を展開する部隊である。彼らは名護国民学校、安富国民学校で訓練を積み、45年1月から恩納岳に戦闘拠点を作り始め、3月下旬から恩納岳に武器、弾薬、食糧を運び入れ、長期間にわたって米軍への遊撃戦を展開する態勢を整えていった。この部隊を編成し教育したのが陸軍中野学校を卒業したメンバーであった。また沖縄島北部を担当する国頭支隊のもと、戦争を進めるうえで障害となる人物、状況を把握し、軍に報告するために、恩納村以北の各地域から33人の教育者、議員などの有力者が集められ、民間防諜組織としての国土隊も結成された。

1945年3月23日未明から沖縄への米軍の空襲がはじまり、翌日には艦砲射撃もはじまった。疎開地域に指定されていた恩納村にも中南部からの避難民が押し寄せてきた。恩納岳には村民をはじめ村外の住民が万単位で避難していたとされる。

米軍は4月1日に北谷、読谷海岸から上陸し、4月3日には沖縄島を南北に分断した。北部へ向かう米軍は恩納村の海岸沿いを進軍し、4月5日には許田に到達した。その途中、米軍は北部進攻と同時に日本軍を攻撃するための拠点を次々と建設していった。恩納



字仲泊のガマから投降し、米軍に収容される住民